

学習者の情意面を意識した外国語教育 —台湾日本語専攻者向け会話授業のアクション・リサーチ—

木原 直子

1. 研究の背景と目的

1970年代後半からヒューマンイズムの考え方と共に、情意面の重要性が語られるようになってきた (Arnold & Brown, 1999; 縫部, 2001)。本稿は、台湾で日本語を専攻する大学2年生以上を対象に、学習者達の情意面を満足させる日本語会話の授業を模索したアクション・リサーチである。楽しく効果的に学ぶことが重要であるが、大学の一斉教育において情意面が軽視されがちな現状を鑑みて、本稿では学習者の情意面に着目した。情意 (affect) とは「行動を引き起こす感情、感覚、ムードもしくは態度一般」(筆者訳) という Arnoldら (1999) の考えに基づき、本研究における「情意面を意識した授業」とは、教師が授業実践時だけでなく、授業計画時から学習者の心的状況に気を配った授業であり、学習の成果だけでなく、学習プロセスも学習者が満足するよう意識して、授業計画・授業実践した授業を指す。

筆者が台湾の大学で外国語教育を行い、参与観察をしてきた結果、様々な気づきがあった。学生の情意面に関連する直感的発見の中で、特に印象的なものとして「ラポール構築の重要性」、「教材開発の重要性」、「目標言語の名前・ニックネームで呼ぶ重要性」がある。本稿の目的は、筆者(教師)の観察上、学習者の情意面に効果があると認識していることを実践し、学習者のアンケート(クローズ質問)で、学習者も同じように認識しているのかを確認することである。また、評価の為に具体的な実践内容に絞り込まなくてはならないので、実践内容(かつ発表内容)は順に「授業後の会話練習」「ビデオ教材」「日本語名」としたが、紙幅の関係もあり本要旨では「授業後の会話練習」と「ビデオ教材」の実践のみ取り上げる¹⁾。

2. 調査1：授業後の会話練習

2.1 概要

2.1.1 背景と目的

まず、直感的に発見したことは、教師と少人数の打ち解けた雰囲気の中でその目標言語を用いて談話をしたことがある学生は、授業中リラックスしているように、見受けられた。KrashenとTerrell (1983)は、学生が効果的に学習する為には情意フィルターが低い状態であるべきだ (p.21) と述べている。そこで、筆者はラポールを築くことで、授業中の学習者の緊張を和らげ、授業に集中できる環境を整えるのに役立つと思われる実践を試みた。

2.1.2 RQ

- ◇ 学習者は会話練習の効果をどう捉えているか。(意欲、能力別)
- ◇ 上記の考えに男女差はあるか

2.2 方法

2.2.1 調査協力者

台湾の某大学の日本語学科の学生の必修科目である3年次の会話の受講者33名である。

2.2.2 実践内容

ラポール構築の為に実践した内容として、授業時間外に約3人の学習者と教師で20-30分程度、日本語で会話練習をした。成績にも、教師の態度にも関係しないことを学生に説明した上で、なるべく楽しい雰囲気になるよう教師(筆者)が意識しながら実践した。

2.2.3 調査内容

データは全てアンケート調査によるもので、各項目に対し協力者に5段階尺度で答えてもらった。表現法としては、5が「非常にそう思う」、4は「まあそう思う」、3は「どちらともいえない」、2は「あまりそう思わない」、1は「全然そう思わない」である。各質問に対して、学生に当てはまる数

字を書き込んでもらう形式をとった。

2.2.4 質問内容

「下記の授業内容はあなたに良い変化をもたらした、もしくは将来よい変化をもたらすと思いますか？」という質問に対し、授業後の少人数による会話練習に関して下記の2点についてどう思ったか5段階で評価してもらった。

- ◇ もっと日本語を学びたい、日本語が上手になりたいと思った。(学習意欲としての評価)
- ◇ この授業内容は私にとって有意義なものだった。(能力・技能向上としての評価)

2.3 結果

2.3.1 学習者は会話練習の効果をどう捉えているか。

学習意欲と能力・技術向上の両項目において、最低値は3であり、否定的な回答は見られず、全体的に高い評価であった(表1)。意欲の平均が4.24で、能力の平均が4.42と全体的に能力の方を高く評価している結果であった。33人の内、意欲と能力の効果を同程度と考える者が23人で7割を占めており、意欲の方を高く評価したのは2人(6%)、能力は8人(24%)という結果であった。この項目の違いをWilcoxon検定で調べた結果、 $p=0.058$ で5%の水準では違いが却下されたものの、極めて5%水準に近い数値であり、学習者は能力向上の方を有意に高く見ている可能性を示している。

表1 授業後の会話練習に関する記述統計

		n	学習意欲	能力・技術
			平均 (SD)	平均 (SD)
全体		33	4.24 (0.66)	4.42 (0.71)
性別	男性	7	4.43 (0.54)	4.71 (0.49)
	女性	26	4.19 (0.69)	4.35 (0.75)

2.3.2 男女差はあるか

表1が示すように、女性よりも男性の方が高く評価する傾向にあったが、男女差をMann-Whitney検定で調べたところ、統計的な差異は見られなかった(意欲： $p=0.449$ ；能力： $p=0.247$)。

2.4 考察

本実践で得ることがあったのは学生だけでなく教師にもあった。教師が学習者のことをより深く理解することで、効果的な教授が可能となる。個人的に話すことで、学生のレベルを把握したり、学生が何を考えているのかを知ったりすることで、よりよ

く学生を導いていくことが可能となる。この考えは、ネウブストニー(1995)の、教師が教授という役割を果たすには、学習者の社会的、文化的条件を理解できていなければならないという考え(p.138)と通ずるものがある。

3. 調査2：ビデオ教材

3.1 背景と目的

3.1.1 背景

1980年代後半以降、日本国内で学習者の多様性への注目、学習者中心、コミュニケーション重視という時代を反映した教材も多数出版されるようになり、教師は選択する眼を養う必要性和自ら作成する能力の習得が求められるようになってきた(島田&柴原, 2005)。効果的な教材として、学習者のレベルに合っており、コース全体の一部のクラスとして教授内容が適切であり、学習者の興味をひきつける教材ということになる。こういう欲求を全て満たしてくれる教材を求めるのには無理がある。教育者や学習者のニーズは様々だからである。全く教材がない場合は、自作することとなるが、殆どの場合、様々な教材を組み合わせたり、教材の一部を作成したりして補完すればよい状況が殆どであろう。本章では、テレビ番組の一部を素材として用いた教授モジュールを作成し、授業で実践した。

3.1.2 教授モジュール

素材として使用した番組、その内容、使用理由などを表2にまとめる²⁾。

各ビデオを学習者に視聴させた後の教授方法は、次の通りである。

- ◇ 「そば」：視聴させ、ビデオの内容に関する質問をし、答えさせる、また会話を楽しむというアクティビティ。
- ◇ 「世界」：ビデオの内容に関する質問をし、答えさせる。
- ◇ 「リベンジ」：見せる理由を説明し、難しいがキーとなる単語を理解させてから、視聴させる。ビデオを巻き戻して、一部の単語を説明する。

3.1.3 RQ

- ◇ ビデオ教材を用いることを学習者はどのように捉えているか。
- ◇ コンテンツにより認識の違いはあるか
- ◇ 学年差はあるか。

表2 素材として使用したビデオの一覧

対象	略名	コンテンツ名	内容	使用理由
共通	「そば」	「やってみよう！おそばの食べ方」(エリンが挑戦！にほんごできます)	そば職人が、そばの食べ方を外国人に教え、外国人が実際にその食べ方で食べてみる。	<ul style="list-style-type: none"> ● そばの食べ方について知る。 ● 日本文化に興味を持つように刺激する。 ● 動作が多く、日本語が比較的簡単。
2年生	「世界」	「世界に広がる日本語 — オーストラリア —」(エリンが挑戦！にほんごできます)	日本好きなオーストラリア人が日本語や日本文化に興味を持った理由と、現在自分の強みを活かし、旅館の経営を通じて、日本文化をオーストラリア人に紹介している姿を紹介。	<ul style="list-style-type: none"> ● 日本語学習者向けのコンテンツなので、日本語が簡単、かつ正確。 ● 同じ外国人として興味を持つ可能性大。
3年生	「リベンジ」	東京リベンジ (デジタル・スタジアム)	音楽(歌詞の字幕と歌詞の内容にあった動画付)。内容は、自分の夢をもって東京に上京したが、現実は厳しく一度は挫折するが、自分の弱さを克服し、更に大きな夢に向かって努力する作者の姿を描いたもの。	<ul style="list-style-type: none"> ● 話し言葉が多く、言語のレベルが学習者に合っていた。 ● コンテンツの内容に学生が興味を持つと判断した為。 ● 擬声語など生きた日本語が学べる素材がコンテンツに含まれていた。

- ◇ 性差はあるか。
- ◇ 教材、名前、それぞれの項目間の相関、また教材の下位尺度と名前の下位尺度間の相関はどうなっているのか。

3.2 方法

3.2.1 調査協力者

台湾の某大学の日本語学科の学生の必修科目である2年次と3年次の会話の受講者30名。一部空欄があった2人を除いた、28人を対象とする。

3.2.2 調査内容

調査1と同様に、5段階評価を書き込んでもらった。質問は以下の通りである。

- (ア) 授業が楽しくなった
 - (イ) 普段(平常)の授業からは学べないことが学べた
 - (ウ) 日本文化について理解が深まった
 - (エ) 一般的に言って、DVDを使用すれば日本にもっと興味を持つようになると思う
 - (オ) 一般的に言って、もっとDVDを利用して授業して欲しい
- (ア)～(ウ)はコンテンツごとに評価してもらった。(また、コードネームは質問順に、「楽しい」、「貴重な体験」、「日本文化の理解」、「興味」、「希望」とし、表などでそれらのコードネームを用いる。)

3.3 結果

3.3.1 全体像

・調査1と同様、回答者28人中、全ての項目において最低値が3だったことから、否定的な回答を持っている人は誰もいなかった。平均値と標準偏差は表3の通りである。

表3 ビデオ教材に関する記述統計

[n=28]

	平均	標準偏差
(ア) 楽しい	4.43	.690
(イ) 貴重な体験	4.68	.612
(ウ) 日本文化の理解	4.61	.567
(エ) 興味	4.61	.629
(オ) 希望	4.18	.819

3.3.2 コンテンツによる違い

2年生と3年生別々にコンテンツの違いの影響をWilcoxon検定で調べたところ、2年生は差が見られなかったが、3年生の「貴重な体験」($p=0.008$ (両側))で差が見られた。「嬉しい」が($p=1.00$ (両側))なだけに、コンテンツの違いを浮き彫りにしている。

3.3.3 学年差による違い

学年差（共通項目のみ）や性差で違いはないか Mann-Whitney 検定で調べたところ、いずれも統計的な差はなかった。

3.3.4 性差による違い

最後に男女間の差を Mann-Whitney 検定（5%水準）で調べた。「そば」に関しては、男女差が見られなかったが、全ての項目において平均値は女性の方が高かった。男性数が更に少なくなり、参考程度（データの取り扱いに注意しなければならない）にしかならぬが、2年生の「世界」には差がみられなかったが、3年生のリベンジでは「楽しい」（ $p=0.934$ （両側））、「貴重な体験」（ $p=0.024$ （両側））、「日本文化の理解」（ $p=0.172$ （両側））となり、「貴重な体験」が5%水準で有意であった。「楽しい」は男性の方がやや高い評価をしているのに対し、その他では女性の方が高い評価をするという結果であった。数が極端に少ない為、いくらノンパラメトリックの手法で調べても、このデータで明白なことは言えぬが、データ数を増やして男女差を調べる重要性が課題として残った。

3.4 考察

「そば」に関するビデオは、予備調査で2年生、3年生共に4.5強と肯定的にとられていた。同じビデオ番組でも、ビデオを見せる前に何を紹介するか、ビデオを見終わった後、何を質問し、何を話し合わせるかを調整することで、学生のレベルにあった教授内容にすることができる。だからこそ、レベルの違う2年生と3年生の満足度が両方とも4.5強という結果が得られたのだろうと考えられる。

また、調査1と同様、否定的な意見を述べた人は32人中誰もいなかったという事実だけでなく、「学生が楽しそうにアクティビティに参加していた」、「非常に集中していた」など授業実践を通じて観察し得たことから、学習者の状況に合わせたオーセンティック教材を使う重要性を認識できた。

4. 結論と今後の課題

本稿では、教師の学習者の情意面にも気を配る態度が、学生の意欲に大きく関わる事が示され、教師の認識と学習者の認識が類似していたことが明らかとなった。しかしながら、本稿には以下のリミ

テーションがある。一点目は、男女差について調べたが、サンプル数（特に男性）が少ない為、参考程度のレベルでしかない。また分布のゆがみによる影響を受けない為、全体像を大まかに掴むことを目的に平均値と標準偏差を用いたことはあったが、それ以外は全てノンパラメトリック手法により、学習者のデータを分析した。今後、対象者数を増やして、男女差の有無について再度調べるべきであろう。二点目は、本研究は事例研究であり、教え方やラホールの違いにより、結果が異なってくる可能性がある。また、被験者のとりまく文化や学習要因が大きく異なる場合、結果が異なることが考えられる。将来、この方面の実証研究が多くなされることで、この分野の知見が確固したものになってくると思われる。

注

1. 発表は、3つの実践調査について説明したが、本要旨では会話とビデオ教材のみを紹介する。名前に関しては、発表内容を更に発展した内容に発表する所存である。
2. 授業で用いたテレビ・コンテンツは以下の通りである。
 - ◇ 国際交流基金 日本語国際センター制作(2006). 「やってみよう! おそばの食べ方」. エリンが挑戦! にほんごできます (第八回) NHK.
 - ◇ 国際交流基金 日本語国際センター制作(2006). 「世界に広がる日本語 — オーストラリア —」. エリンが挑戦! にほんごできます (第四回) NHK.
 - ◇ 日高亜矢(2007). 「東京リベンジ」. デジタル・スタジアム NHK.

参考文献

- 島田徳子・柴原智代 (2005) 「日本語教材作成のための一つの視点-教授設計論の適用、学習過程への注目、教室活動の分析指標」『国際交流基金日本語教育紀要』1, 53-67. 中川千恵子 (2001) 「日本語学習者のプロセス-習得とその指導法」(未公開) お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士論文
- 縫部義憲 (2001) 「日本語教師のための外国語教育学」 渾々社.
- J.V. ニューストブニー (1995) 「新しい日本語教育のために」 大修館書店.
- Arnold & Brown H.D. (1999). A map of the terrain. (In Arnold, J. (Ed.), *Affect in Language Learning*. (Cambridge : Cambridge University Press, 1-24).
- Krashen, S. D. & Terrell, T. D., (1983). *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. NY: Pegamon Press.